東京支店集結で相乗効果高め

柴田熔接工作所

海外でのSNOW（雪）ビジネスが点火

柴田　勝紀社長

総合アイスプラントメーカーを目指し推進する柴田熔接工作所（社長＝柴田勝紀氏、本社・福岡県福岡市南区塩原3―13―16）は昨年まで同社の東京支店ならびにCAREL JAPANの横浜市へ構えていた拠点を東京都港区浜松町へ移転・集結させ、さらに相乗効果を上げていく。

同社は今回のHVAC&R JAPAN2016においては前回同様、柴田ブースとCARELブース合同6コマにて出展。柴田ブースにおいては環境に配慮した、ノンフロンコンデンシングユニット「CO_2トランスクリティカルブースターユニット」をメインに、併せて基幹製品のフレークアイス製氷機を出展。トランスクリティカルブースターユニットはヨーロッパで主流に使用されている低温域でのCOPが高い省エネ製品。蒸発器への送液圧力も2～3MPaと低圧なため、安心し使用できるほか、高い制御技術によって温暖地域での使用も可能としている。

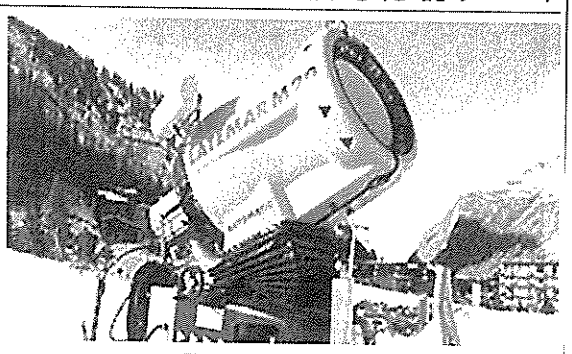
一方、CARELブースではイタリア・CAREL社製の冷凍冷蔵・空調に使用する電子膨張弁及び制御機器として遠隔監視システムやCO_2ラック制御機器を出展し、高効率を実現する電子膨張弁の実演などを行うとしている。

これまで2013年より開発を進め、製品化を果たしたノンフロンコンデンシングユニット「CO_2トランスクリティカルブースターユニット」だが当初より商流としての食品流通などとの協議やショーケースメーカーとの折衝を図ってきた。

この度、同社ではモノづくり補助を申請し、認可されたことで商流対応において、基幹事業とも隣接となる冷凍冷蔵の倉庫や物流センターといったマーケットへ対し、実績を積み上げるよう方向転換を図っていく。

一部の協業先として食品工場の設計・施工に明るいエンジニアリング会社との交渉を前向きに進めているところだ。

一温帯での取り出しが可能で、中・低温域でCOPが夏場で3を示し、外気温が24度C程度であればさらに4までの能力向上が可能であること。こうした技術公開についても冷蔵庫向けとして22・35・75HP（馬力）といった大型化も図りつつ、市場に対するポテンシャルを上げていく。



同社の人工降雪機

柴田勝紀社長は「何れフロン新法でも謳ったように、低温ゾーンの主要冷媒は、大手冷凍機メーカーの動向を見ていても現行のフロンから自然冷媒系へ傾いていくものと予測している。その意味では当社の取り組みも、この流れに乗っている」とした。

一方で海外の需要としてSNOW（雪）ビジネスが俄かに脚光を浴びつつあるとし、同社でも既にタイ国などを基点として日系の大手スーパーからの引き合いに技術サポートを行い出した。

2016年、2017年とアジア圏を中心に案件は進行中で再び、人工増雪機や人工降雪機などへ需要を見出すほか、生産力強化として現行の福岡県大野城市の工場増設と技術者育成を今期以降の主題に掲げた。